日本詩歌読本

大岡信

三修社

日本詩歌讀本

大岡信

三修社

大岡信（おおおか まこと）

一九三一年静岡県三島市に生まれる
一九五三年東京大学文学部卒業
詩人、明治大学教授
詩集—「記憶と現在」「わが詩と真実」「遊星の寝返りの下で」「悲歌と祝禱」「春　少女に」「大岡信詩集」など
著書—「現代詩試論」「超現実と抒情」「紀貫之」「彩耳記」「岡倉天心」「日本詩歌紀行」「アメリカ草枕」「詩への架橋」「折々のうた」など
他に「大岡信著作集」全一五巻

日本詩歌読本

昭和五十七年十月十日第一刷発行

著者　大岡信
発行者　前田完治
発行所　株式会社三修社
〒110 東京都台東区下谷一—五—三四
電話〇三—八四二—一七一一（営業）
〇三—八四二—一六三一（編集）
振替東京九—七二七五八
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　牧製本印刷株式会社

定価　一二〇〇円

ISBN 4-384-05004-6 C1092
©Makoto Ooka 1982 Printed in Japan

日本詩歌読本／目　次

第一章　詩歌の主題の時代的変化
実感と本音に根ざした文学史を……9
『万葉集』には人間の戦いのドラマがあった……12
感受性を磨いて時の充実を図った『古今和歌集』の人々……18
『新古今和歌集』を象徴する暗く思いつめた忍ぶ恋……24
日本の恋愛詩には西洋流の女性讃歌がない……30
第二章　独り寝のテーマについて
三十一文字にすべての思いをこめる作歌法……41
過度の技巧は調和を重んじる社会が背景……44
描写なくひたすら自己中心的な日本の詩歌……47
定家と人麻呂に見る表現第一主義……50
「衣」に物語らせる独り寝の寂しさ……54
即物的な肌寒さを歌う「独り寝」の歌……58
描写は女性の筆により物語文学で開花……64
徹底して自分の思いにこだわった曾禰好忠……65

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第三章　女性の恋歌Ⅰ　――大伴坂上郎女と額田王
大伴旅人の〝座〟は歌人集団の典型例だった……73
旅人の讃酒家は妻の死への悲しみから……76
男と対等の意識で恋を歌った坂上郎女……80
額田王の歌は神に対する集団の祈りだった？……86
万葉初期の恋歌は公的な性格を持つ……93
第四章　女性の恋歌Ⅱ　――笠女郎と狭野茅上娘子
私的な恋情あふれる『万葉集』で出色の恋歌……101
切迫感と技巧が生む恋歌のダイナミズム……105
女性の恋歌こそ日本の詩歌を支えた地下水……109
狭野茅上娘子の歌はフィクション？……114
第五章　女性の恋歌Ⅲ　――和泉式部
恋愛を至上目的として生きた和泉式部……123
感覚の粋をきわめて恋愛を芸術化した時代……127
帥宮挽歌――異様なほど度外れの魂の叫び……132

古いテーマを奔放な恋愛体験の中で昇華……136
他に類のない透徹した女の哲学を歌う……140
天才的としか言いようのない言葉の選び方……147

第六章　長歌と旋頭歌について

人々の自己認識に応じて詩歌形式も変化……155
江戸期以降『万葉集』とともに長歌が復興……159
状況説明で大きな情感歌う人麻呂の長歌……163
テンポの緩急を使い分けて大柄な相聞歌に……170
おおらかな風景に情感を重ねる人麻呂の方法……176
歌謡的なゆえに短歌に負けた旋頭歌……178

第七章　和歌の中の花

花の散り際——日本的美意識のポイント……187
世阿弥の能楽論の根底にも花の思想……191
『万葉集』の花は今や盛りと咲く麗しい梅の花……195
華やかに豪勢に散る桜の花が『古今和歌集』の中心……200

精神世界に散る花に無常観こめた『新古今和歌集』……206

第八章　歌人（うたびと）の視点・その変遷

現実謳歌、喜びにあふれて詠んだ平安初期……219
やがて視点は内面化し孤独な歌が増加……224
『万葉集』に歌の可能性を探った南北朝の時代……230
心をすて眼に徹して自然の変化を詠んだ伏見院……234
外界の断片にだけ眼を向ける放心の歌の世界……238

第九章　連句と歌謡

芭蕉の詩論・生き方にぴったりだった連句……247
連句は三句目からの展開が見どころ……250
解釈が変わり季節が移る共同製作の醍醐味……254
情景を彷彿とさせるところにつけあいの妙……261
近代詩歌に影響を与えた歌謡集『梁塵秘抄』……265

あとがき……276

第一章

詩歌の主題の時代的変化

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

実感と本音に根ざした文学史を

「日本の詩歌」というと、『万葉集』の柿本人麻呂、あるいは山部赤人、『古今和歌集』では紀貫之、『新古今和歌集』では藤原定家など各時代の有名な詩人たちを取り上げながら、年代順に話をしていけば自然に筋がとおり、それがオーソドックスな方法のように思われてきました。私もそのやり方でお話ししたほうがやりやすいかもしれません。しかしただ順序よく、歌集、あるいは詩集を並べ、有名歌人を列挙しただけで「日本の詩歌」がわかるとも思えません。そこで、私は従来の方法にとらわれず、私なりのやり方で、今の機会に私に言えること、考えていることをお話ししていこうと思います。その意味で、まず私の「日本の詩歌」というものに対する基本的な姿勢、立場からお話しします。

「日本の詩歌」と一口に申しますが、それならば、読みやすい形で「日本の詩歌」について今までにたくさん書かれているかというと、実はそうでもない。たいていの人が、中学、高校、大学などで、ある時間だけ「日本の詩歌」について勉強し、有名歌人の名前を覚えますが、時がたつと、そういえば柿本人麻呂についての話も聞いたことがあったなあ、という程度の記憶で終わってしまいます。

日本人が詩を書く場合、どういう感じ方で事物をとらえるか、自然界をどんなふうに描くか、そこにはどんな共通な特徴があったか。あるいは例外的な考え方をした人たちはどんな作品をつ

くったか。

生きていること、死、病気、恋愛。恋愛は特にテーマとして大きな部分をしめていますが、それらを日本人はどういう特徴的なものの考え方において描いたか、などについてはあまり教えてくれない。文学史や詩史も、万遍なくいつの時代にどういう人がいたということは書いてあっても、それらの人々を通して、日本人が長い歴史の中で培った感受性が、いかなる点で特徴的なものであったかについては触れていない。

確かにこの問題に触れることは難しいことです。学問的な蓄積を背景にした上で、自分の考え方はこうだと断定できる自信がない限り、軽々しくは言えないからです。学者もほとんど、控え目にしかこの問題には触れません。しかし、困難を承知で、日本人の感受性の特徴をもう少しはっきり語ってくれる人がいてもよいのではないかと、私は学生のときから思っておりました。自分が怠け学生であることを棚に上げて言えば、教えるほうも、もう少し色を着けてくれてもよいのではないかと考えたのです。

それというのも、私はそのころすでに、自分が詩を書いておりましたので、漠然とはしていましたが、現在自分の使っている言葉の、源といいますか、日本の風俗習慣、風土の中で長い間かかってでき上がった、日本人としての感性の在り方を考えずにいられなかったのだと思います。

確かにフランスの詩やイギリスの詩は、ある程度古いものでも辞書があれば読めるし、知識としての興奮、おもしろ味というものも得られます。それにひきかえ、日本の古典は、江戸時代、

いや明治、大正のものさえ辞書があってもわからないところがあります。しかし、外国には外国の土壌があり、どれほど私たちが理解できたと思っても限界があるということもわかってきます。つまり、私たちはフランス語の詩を読んでも、日本人の感性で読まざるを得ない部分があり、あらためて日本語および日本人の感受性の問題に突き当たるというわけです。

そういう状態を経て気がついたのですが、私たちの周囲にはそのようなときに、専門的な知識を、具体的に、一般にもわかるように話してくれる人が、いかにも少なすぎるということです。これはほめられたことではない。話すにしろ、書くにしろ、自分の心の振幅を通して専門のものを、あるいはよく知っていることを教えてくれることは大切です。

藤岡作太郎という人がいます。この人などは、その意味では数少ない人の一人です。惜しいことに若くして亡くなりましたが、藤岡氏の書いた『平安朝文学史』は、現在では古典として非常に尊崇されています。書いたのはまだ二十代だったと思いますが、この人は、『平安朝文学史』だけではなく、日本のその後の文学史も生涯かけて書こうとしました。実際に実現できたのは『平安朝文学史』だけでしたが、この人のものは読んで非常におもしろい。なぜおもしろいか。書いている本人の心が躍っているところがわかるように書いてあるからです。

藤岡作太郎は、その若さで他の部門の仕事もいくつかしていて、その一つに『日本絵画史』があります。これも実によい。そのような仕事をしている人ですから、文学の歴史を書いても、おのずと広い範囲の目配りがある。単なる専門知識の披露に終わっていない。巷間の学者によって

書かれた文学史にはないものです。初めて文学に触れたとき、どこで感激したか、涙を流したかが学者の文章では全然出てこない場合が多い。学者の方々は短絡的な判断と思われるかもしれませんが、詩が好きでつくってきた立場の人間として眺めてみると、そのことを強く感じる。学問のたくさんある人が、この文学のこういうところに感激した、その後学問を積み上げさまざまな分野に広がっていったが、その端緒は意外にもこんなところにあった。あるいはどの本が自分に決定的な道を選ばせたかなどということを書いて欲しいのです。

何事につけ最初が大事です。最初にどういう言葉遣いで話をし始めたか、どういう家庭環境の中で最初にどういう難しい言葉を覚えたかが大事です。日本の学者も江戸時代、またそれ以前の偉い学者たちは、そのことに意を用い実践もしました。だが明治になって、外国の言葉および文化が盛んに入りだしますと、それを消化するのに精いっぱいとなり、学者は慎重になりすぎ、本音をあまり言わなくなりました。江戸時代の偉い学者はみな好き嫌いを露骨に出している。もちろん、それだけがよいとは言えませんが、そういう人間的なところは学問にも必要なことだと思います。

『万葉集』には人間の戦いのドラマがあった

詩歌の歴史の中で最も重要な主題といえば、何といっても生きている喜びとか死ぬことの悲しみです。そこに絡んでくるのは人間の感情であり、春夏秋冬の移り変わり、そして、旅をするこ

とで生ずる変化です。旅の歌などを読むと、そこに深い運命観を感ずることが多いものです。

次に最初に申しあげた生死に関わる主題ですが、お祝いということも日本の詩歌では重要なテーマの一つです。昔は平均寿命が現在のように長くはありませんから、四十になれば相当の年齢になったということで、貴族階級では賀宴をしました。五十、六十、七十、そして七十七歳、八十八歳などと祝います。

今までのべた主題の範囲に入らないものもあります。単なる人生観、貧乏していて人生がはかないことなどを述べるもの、これを述懐といいます。自分の抱いている思いを述べるものです。日本人が詩人といえば、まず柿本人麻呂をあげ、芭蕉をあげ、あるいは西行をあげます。西行は、平安朝末期から鎌倉時代にかけて生きた人ですが、出家して、述懐の歌をいちばん得意としました。

述懐の歌はふつう、雑歌と言われています。分類してもうまくはまらないものを雑の部類にしているわけです。『古今和歌集』『新古今和歌集』など勅撰和歌集にはそういう雑の部類が必ずあります。季節、恋、そして雑。述懐は季節でも恋でもない、もう少し深みのある、人生をどう認識するかを歌っている部類です。平安朝のころはあまり重視される部類ではなかったのですが、西行が出てきて雑の歌に非常に深みを与えました。一人の詩人が出て、ある主題を深めるということがあるわけで、西行の場合もそうでした。

その西行を継いで芭蕉が出てきました。芭蕉は江戸時代の前期に生き、元禄に死にましたが、

元禄の初期に最も充実した仕事をした人です。

芭蕉は西行の述懐、雑の系列を引き継いで、さらに深め、同時に広めました。どうやって広めたかといいますと、西行は独りぼっちで孤独を歌いましたが、芭蕉は独りでやるだけではなく仲間、つまり門人たちを集めて一緒に芭蕉の高みにまでみんなではい上がっていく、いわばグループで仕事をしたのです。それらは『芭蕉七部集』その他の選集になって残っています。芭蕉の『七部集』というのは、門弟たちが各時期に自分たちの選集をつくったわけです。芭蕉が編集に関与したこともあるし、弟子たちに任せたこともあります。それらの中から、芭蕉没後しばらくして七冊の集を選んでいわゆる七部集をつくった人がいます。『冬の日』という本から始まって、最後は『続猿蓑』です。これは芭蕉の新進気鋭のときから始まり、死ぬ直前までのものが収められています。芭蕉の生前は『七部集』というものはありませんでした。『冬の日』、『春の日』、『曠野』、『ひさご』、といったそれぞれの集の名前で出されました。

芭蕉のやった仕事でいちばん重要だと思うのは、西行の述懐を深め、かつ大勢でその境地をいっせいに追及したことです。平安時代には恋とか季節の歌の陰に隠れていたそういう人生観を吐露する詩歌が、江戸時代になってはっきり大きな流れになったと言えましょう。時代時代で、詩歌の主題にも変遷が出てくるのです。

奈良朝につくられた『万葉集』で何といっても独特なのは戦いの歌です。その当時は、まだ天皇制が安定していない時期ですから必然的に戦いの歌になります。闘争そのものの歌はあまりあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.